
ドラゴンクエスト? ~ 天恵物語 ~

冬生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンクエスト？ ～天恵物語～

【Nコード】

N7878Z

【作者名】

冬生

【あらすじ】

世界樹に女神の果実が実った時、神への道は開かれ永遠の救いを得る。

天使達はその言い伝えを信じて、世界樹に星のオーラ 人間の感謝の結晶 を捧げ続けていました。

ウォル口村の守護天使となったりタモまたその一人でしたが……突然起こった出来事により、彼女の運命は大きく変わってしまったのです。

注）ドラゴンクエスト？の二次創作です。そして、他サイトとの重複投稿だということをご了承ください。お読みください。

天使の落ちた村

少女が一人、守護天使の像の前で突っ立っていた。銀髪に紫色の瞳が印象的な、なかなかの美少女だ。しかし、その少女の顔は曇っていた。

それも全て、この目の前の天使像のせい……という訳ではないが、この像も顔を曇らせる原因の一つになっていた。

（にしても、全っ然私に似てないよね……）

初めて石像を見た時も、同じ感想を持ったものだっただ。

浮かない顔で石像を眺めていると、その時「おい」と誰かに声をかけられた。

この声の主は……村長のドラ息子だと言われている、ニードだ。

「えーと……なんか用ですか？」

「お前だよな。大地震のとき、どさくさに紛れてきたヤツは。守護天使と同じ名前らしいけど……実のところはどうなんだかなあ」

その言葉を聞いて、少女 リタはさすがにムツとした。実際、言われた通りなので何も言い返せないのだが。

「本当に変な奴ですよ。着てる服も変なら、どこから来たのかも言わないし」

「だいたい、旅芸人つてのも本当なのかよ？」

服のセンスで人につべこべ言われたくないし、と内心毒づきながらもリタはやっぱり何も反論しなかった。

（これ以上、この村で騒ぎを起こしたくないんだから）

よって、リタはひたすら沈黙を守り耐えて来た。自分の出自を言っても、混乱を招くか馬鹿にされるかの二つに一つ。良いことなんて決して無い。言うつもりなど、さらさら無い。

（それに、わたしは人間じゃないんだから……）

リタは、天使界から（文字通り）落ちてきた天使。

しかも落ちたこの村を護る、守護天使だったのだ。「ニードさんは……最近リツカがアンタにベツタリだから、つまらなく思っているんじゃないぞ！」

「おいつ、バカなこと言うな!!」

ニードに敬語を使うその男は、結構おつちよこちよいみみたいだ。

（そんなんじゃない。リツカは皆に優しいよ）

ニードがリツカに惚れているのは明らかに分かるが、それを今わざわざ言うつもりは無い。

そしてそこに、リタの唯一の救世主がやってきた。

「ちょっと二人共、うちのリタに何か用なの?！」

「げっ……リツカ！」

リツカは、オレンジ色のバンダナが特徴的な宿屋の娘である。そんな彼女の怒った顔を見て、ニードはたじたじ。二人の関係上が一目で分かる光景だった。

「よ、よおリツカ。別に……こいつにこの村のルールを教えてただけだ。おい、行くぞっ」

リツカの登場に狼狽えたニード達は、そそくさと逃げ去って行った。ほっと息をついたリタは、その場を救ってくれたリツカに礼を言った。

「リツカ、ありがとう。お陰で助かつちやった」

「ふふ、どういたしまして。でもリタ、あなたももう少し言い返した方がいいわ。ニードも、そんな悪い人じゃないんだけどね……」

そう懸念してリツカは言うが、リタが首を縦に振ることはなかった。前述のとおり、この村で騒ぎは起こしたくない。

天使界からウォル口村に落ちてきたリタは、傷だらけだった。

今はリツカの介抱のお陰でやっと元気になって、今では走り回れるほどののだが。

「さぁリタ、早く家に入りましょう？　まだ傷が治ったばかりなんだから安静にしてなきゃ」

「リツカ……私、傷はもう大丈夫だよ！」

天使は人間より傷の治りが早い。よって、落ちた際の傷はすっかり癒えてしまったのだが……。

「駄目よ、それに昨日風邪を引いて治ったばかりでしょ！　今日もしっかり休まなきゃダメよ！！」

「リツカ……」

リツカはリタの手を引っ張り、自分の家へと強制連行した。

（本当に大丈夫なんだけどな……）

リツカは基本的に優しいが、病人に対してはかなり手厳しかった。リツカの家で療養して早一週間。リタは、まだ一度もこのウォル口

村から出ることが出来ずにいた。

（天使界の皆は元気かな……）

目覚めてから、ずっと心配していたこと。

念願の女神の果実が宿ったと言うのに……自分は地上に落とされ、果実はそこかしこにばらまかれてしまった。

（長老様、イザヤールお師匠……）

長老・オムイと師匠であるイザヤールの顔を思い浮かべる。

（……私は、大丈夫。とにかく今は何をすべきか考えないと）

決意を秘め、リタは今夜、ウォル口村からの脱出を試みることにした。

（とりあえず、何かお礼に残していかないといくらなんでも失礼だよね……。ってわたし、一文無しじゃん！！）

そして、そこには意外な展開が待っていたのだ。

夜もすから。

窓枠に手を掛け、よじ登る。リタは宛がわれた二階の部屋から脱出を試みた。

「い、意外と高いかも……」

たかが二階、されど二階。自分の身長の三倍はあるのではないかという高さだ。

しかし、ここで引き返すことは出来ない。

（ごめんねリツカ……）

恩人に黙って抜け出してしまうことになってしまった。

（お礼も何も言わないまま出ていくなんて……不良だ。いや、一応置き手紙は置いてきたけれど！）

天罰を受けるかもしれない。

天罰と言えば、つい最近ニードにちょっとした天罰を食らわせたこ

とを思い出した。

「すみません、お師匠っ！ リタは不良になります……！！！」

窓枠を蹴るように外へ飛び込んだ。

「うわわっ?!」

ドスン。

そんな音と共にリタは地面に叩きつけられた。

「いったあゝゝ」

「……お前、何やってんだ？」

「……………ニード、さん」

村長の息子、ニードだった。

「ニードさんこそ、何を？」

「いや、ちょっとな……そうだ、丁度良い。お前ちょっとこっち来いよ」

ニードは建物の影に来るようと手招きをした。

とりあえず、脱走がバレるわけにもいかないので大人しく建物の影に隠れた。

「なんですか？ ……言っておきますけど私、ちゃんと旅芸人です」

「違えよ、その話じゃねえ」

「あれ、そうなの？ じゃあ服のセンス？ これは着用の義務があるから着ているだけで、私は別に……」

「だから違ええーっ！！ お前、何気に昨日のこと根に持っているだろ！！ そうじゃなくて……」

「こ、声大きいよニードさん！」

今はまだ明け方。リツカだけでなく皆が寝ている。

はっとして口を押さえたニードだったが、気を取り直してリタに話を持ち掛けた。

「峠の土砂崩れを何とかしたい？」

体の至るところにくつついていた葉っぱを払いながらニードに向き合った。

ニード曰く、その東の道にある土砂崩れを退かして親父に一泡吹かせたいのだとか。

「リタ、認められたいんだからな。一泡吹かせたい訳じゃねえから」

「どつちでも同じなんじゃない？」

「……まあな。だけど今、外は魔物がうようよしている。そこでダリタ、旅芸人ってのは結構腕が立つんだろ？ だから俺と一緒に来んねーかな？」

ニードの提案に、しばらく考え込んだ。

リツカの家からの脱走計画は、ニードに見つかった時点で、ほぼ失敗に終わっている。

だったら別に頼まれても良いかな、と思うわけで。

「しょうがないな……その話、乗った！」

「そうか！　なら早速、」

「でもちよつと待つて、今は魔物の活動が活発になるころだね」

早朝は、エサを求めて動き回る時間帯だ。それに魔物は空腹な為、気性が荒くなっている可能性もある。

「わざわざそんな時に行かなくてもいいんじゃない……。まあエサになりたいっていうなら別だけど」

「俺にそんな自殺願望は無い」

「じゃあ、日が昇った日中に行くことにしましょう。……ようこそ
しよ」

「何やってんだ？」

ニードが怪訝な顔をする。それにリタは笑顔でもって答えた。

「私窓から出てきたから……ここをよじ登らないと帰れないんです
！」

玄関から堂々と帰ったら、家出しようとしたのがバレる上、怒られてしまうだろう。もちろん、リッパに。

開いた窓を示すと、ニードの顔がア然とした顔に変化した。

しかもリタは見たところピンピンしているし、無傷だ。かすり傷さえ見当たらない。

「お前……本当に人間か？」

いいえ、守護天使です……とは、さすがに言えなかったけれど。

「準備は良いか？」

「当たり前！」

「……じゃあ行くか」

ニードが「こいつ、だんだん敬語を使わなくなってきたな……」と内心思いながらも村を出ようとした時だった。

「あれ？ 二人とも、どっか行くの？」

やけに幼い男の子の声が二人を引き留めた。
そこにいたのは、まだまだあどけない村の少年。……二ードに軽い
天罰を願ったあの少年である。

「うん、ちよつとあそこまでね」

リタが東の方角を指差すと、その小さな男の子は「あっ」と声を上げた。

「そつえば僕、あっちの方に何か光るモノが落ちてくの見たんだ」

「「光？」」

流れ星か何かだろうか。最初はそう考えたリタだったが、男の子の
次の言葉によってどうやら違うらしいことが分かった。

「地震の時に落っこちてたんだ。でも誰に言っても信じてくれない
んだよね。ねえ、兄ちゃん達で見てこれない？」

これに対する二人の反応は、正反対だった。

「はあ？ お前それ、流れ星とでも見間違えたんじゃない……」

「分かった、任せといて！！」

「……マジかよ、お前」

大きく胸を張るリタに、げんなりとした顔を向けるニード。

「お前……簡単に安請け合いすんなよ……」

「だって気にならない？ もしかしたら……」

地震と同時ということは、天使界から落ちてきたモノかもしれない……
……そう言いかけ、慌てて口をつぐんだ。

（あ、危ない……）

うつかり口を滑らせるところだった。

「もしかしたら……何だよ？」

ニードと男の子は、いきなり黙り込んだリタを見て首を傾げた。

「も、もしかしたら……流星が落ちたのかもしれないでしょ！
なんちゃってあはは」

その場は何とか適当にごまかしたが、リタが意気込むのには理由があった。

（天使界に、帰れるかもしれない……）

帰れなくとも、天使界の誰かと遭遇する可能性は高い。

「よし、行こうニードさん！ 出発だあー！」
「なんでそんなに張り切ってたよ、お前……」

この話を持ち掛けた本人よりも張り切りながら、リタは東の峠への道を進んだ。

「そっぴゃお前、リッカには何て言ってきたんだよ」

昨日まで、過保護と言っても過言ではないくらいリタの世話を焼いていたリッカを見ていたニードは、外出許可が出たことに疑問を持

っていた。

だから、そのワケを聞いてみたのだが……

「うん、最初は渋ってたんだけどね……。なかなか引き下がってもらえなかったから、“ニードとデートだよ”って言ったら何も言わなくなっちゃったんだよね」

もちろん、ニードのリツカへの好意を知った上での発言であつた。

「……勘弁してくれよ」

「あはは、昨日の仕返しだよ」

「やっぱり昨日の出来事を根に持っていたんじゃないかよ！」

実は、そのことについてはあまり怒ってはいないのだが、手っ取り早く外出するにはこうするのが一番だと思つたのだ。

「うーん、それにしても結構森ばかりなんだねー」

「田舎なめんなよ。セントシュタイン城へなんか、今じゃ峠の道を使わなきゃ行き来出来ないんだからな！！」

それ、偉そうに言えるものではない……そう思つのはリタだけだろうか。

「じゃあ、尚更あの土砂崩れをどうにかしないと」

「そうなんだよ、何とかしねえと……って」

ニードの動きがピタリと止まった。

「リタ、早速魔物だ」

「魔物って、あれ……」

モーモンだった。

「なに、あれを倒せって言つのか？」

指差すリタの手は少し……いや、かなり震えていた。

「あんな可愛いのに……!!」

見た目も動きもふわふわしているモーモンを倒すのは、ある意味難しそうだ。

「いや可愛いつて、おま……」

「こっちおいで」

「何引き寄せてんだよ?! ってマジで来たし!!」

モーモンは、ふよふよと飛びながらリタの元へやって来た。

「ほらー、全然大丈夫じゃん」

「な、なんだ……。ったく驚かせるなよな」

モーモンを撫でるリタを見て安心したからか、若干及び腰なニードがモーモンへ一歩近付いた……。次の瞬間。

『シャツッ!!』

モーモンは、ニードに威嚇した。

「うわっ……」

「……やっぱ、あんまり大丈夫でもないみたいだね」

リタには大人しいが、ニードには狂暴なモーモンだった。

「なんだよ、こいつ！ 見た目可愛くても性格は最悪じゃねえか！
」

『シャツッ！！』

またもやモーモンはニードに威嚇した。

「こいつ、俺の言ってること分かんのか？！ つーか、威嚇してる
時のこいつの顔マジで恐え！！」

牙剥き出しのモーモンは元の造りが可愛いだけあってか、恐さ百倍
だった。

「言ってることは分からなくても、自分の悪口を言われているくらいは分かるんじゃないかなあ……」

憶測に過ぎないけれど。

その後も、遭遇したモーモン達はなぜかニードを威嚇し続けたのだとか。

「ようやく、着いたな……！」

やっと峠へ到着した。と言ってもリタはピンピンしていたのだが……

「ニードさん、大丈夫……？」

「お前は大丈夫そうに見えるか、これが？　くそ……モーモンなんて大っ嫌いだ！！」

（主に）モーモンから威嚇という名の襲撃を喰らったニードは、すでに疲労困憊な状態だった。

（それにしても……）

目の前に広がる二股の道。

ちょうど真ん中に、天の箱舟を見つけた。

（箱舟……男の子が言ってた“大きな光るモノ”って箱舟のことかな）

中に誰かいたりするだろうか……。

（でも何の気配もしないんだよなー）

でもなー、と考え込んでいたその時。

「、……い……おい、リタ！」

「えっ……あ、はい?!」

深く考えていたせいで、ニードの呼び声が聞こえていなかったらしい。

「何ボケーンとしてんだよ。木が倒れてるだけだろ、そんなに面白いのか？」

「…………え？」

そう言われて、ハツとした。

（そっか、人間には見えないんだった）

天使である自分は、人間にも見えないモノも見える。これからは、そうだったことも隠していかないとなのかと思うと、少し気が重くなった。

「そ、そうですね！ 面白いかも！！ あははー………多分。ニードさん、先行ってていいですよ？」

少し挙動不審になったが、幸いニードはそれに気付かず「変なヤツだな」と呟きながらも土砂崩れ現場へと向かった。

「…………さて、中には誰がいるのかな？」

天の箱舟は運転席らしき部分しか無かった。他の車両はバラバラに飛ばされてしまったらしい。

試しに入り口らしき扉をノックした。

コンコン……

「返事がない……」

ただの屍のようだ、と続けたいところだが、あいにくリタにそんな余裕は無かった。

「ええっ、それは困る！　お願い誰かいて失礼しまーす！！」

扉に手を掛け、グツと力を入れる。

だが……

「~~~~っ！　あ、開かない?!」

これは結構ショックだった。

「何さ！　天の箱舟が盗まれるなんて、そんなこと天文学的数値並に稀なんだから、ここまでセキュリティ万全にする必要無いじゃん！！」

そういう問題では無い。

「……しょうがない、他の方法を探すしか無いかな」

がつくり肩を落とし、遙か上空の天使界を仰いだ。

そんなリタを影から見つめる存在がいるとは気付かずに……。

「ニードさん！ 土砂崩れの方、どう……ですか」

崩れ具合を尋ねかけたリタは、それを見てうつと言葉を詰まらせた。

そこには、巨大な壁のように高くそびえ立つ木や岩や土。

「土砂崩れって、これかよ？ 正直ナメてたぜ……。こんなの、どうにもなんねーじゃんか！」

ニードは思わず土砂崩れに八つ当たりをした。ガラリ、と瓦礫が転がり落ちる。

すると同時に、向こう側から声が聞こえてきた。

「おーい、誰かそこにいるのかーっ！？ いるなら返事してくれー！」

若い男の声だ。

もしかしたら……

（助けに来てくれた人かもしれない！）

「おーい、ここにいるぞお！ ウォル口村のイケメン、ニード様はここだぞーっ！」

……………イケメン？ しかも、自分で言っちゃうのか。

しかしリタは、ニードの言葉を敢えて聞き流すことにした。
それは兵士も同じらしい。

「やはりウォル口村の者か！ 私達はセントシュタイン城に仕える兵士だ。王様の命令で、土砂の撤去を命じられてやってきたのだ」

ニードは肩を竦め、兵士には聞こえないくらいの声でぼやいた。

「なーんだ、俺達が頑張らなくても大丈夫みたいだな。これを持ち帰るだけで俺は村の英雄みたいなの？」

「そんな世の中甘くないよ、ニードさん」

そんなリタの忠告をニードは黙殺した。引き続き、土砂の向こうから兵士の声が聞こえてきた。

「ニードと言ったか、このことをウォル口村に伝えてはくれまいか？」

「分かった、確かに伝えておくよ！！」

胸を張って答え、有頂天のニードは足早にその場を離れようとしていた。

「それから、もう一つ確認したいことがある。地震の後、ウォル口村へ向かったルイーダという貴婦人を知らないか。村へ行く途中にあるキサゴナ遺跡へ向かったまま消息が知れないのだ」

「キサゴナ遺跡……？」

そういえば、ここへ来る途中に“キサゴナ遺跡”と書かれた看板があったような気がする。

その遺跡に一人の女の人が単身で乗り込んで行ったらしい。

「キサゴナ遺跡って……魔物が出て危ないところじゃねえか」

そうばやくニードだったが、結局はその頼みも了承した。

「よし、こうなったら長居は無用だ。急いで村に戻るぞ！」

言っただが早いか、ニードは物凄い勢いで歩き始めた。

「ちょ……ニードさん、速いよ！ 速いですってばあ！！」

しかし、この後ニードは飛ばし過ぎたお陰で早くもスタミナ切れになっちゃったのだった。

リタとニードの二人は、ウォル口村に帰ると事の次第を村長に知らせた。

そこにはなぜか……

「リック！ なんでここにいった？！」

そう、リツカがいたわけで。

「なんでって……あんたがりたを連れ出したりするからでしょう！
しかも、デートだとか何とか！」

「それは誤解だリツカ！！」

「う、ごめんリツカ。実はデートとかじゃなかったりして……」

「あら、そうなの？ 心配しちゃったじゃない。リタに悪い虫でも
付いたらいけないもの」

「……………うん、ありがとう」

申し訳なさ八割、ニードへの同情その他諸々二割で、なんだか複雑
な心境なりタだった。

（ニードさん、報われる日がきつと来ますよ……………多分）

確信は全然持てないのだが。

「最近は魔物が多いから村の外に出るなとあれほど言ったではないか、馬鹿者が!!」

村長……つまりニードの父親の大声が室内に響いた。ニードも負けじと言い返す。

「でも、俺とリタが行かなかったら土砂崩れのことからなかっただろ？」

「別に知らなかったところで、道が繋がればおのずと分かったことだ！」

痛いところを突かれたニードは黙る他なかった。

その様子を眺めてから、リタはリツカの方をそろりと向いた。

「リツカ、ホントにごめんね……？」

「ううん、もういいよ。ケガもないみたいだし。それにしても、ルイダさんって……その話、本当なの？ わたし、その人知ってるかもしれない。確か、お父さんの知り合いにそんな名前の人がいたの。もしかしてルイダさん、お父さんが亡くなったの知らなくて会いに来たんじゃ……？」

その可能性は十分にあった。

「そっか、知らないままウォル口村……というかキサゴナ遺跡に向かっているのかも……」

「えっ、キサゴナ遺跡に……?!」

(ニードへの)村長の説教をBGMに、リタとリツカはルイーダの消息についての憶測を展開していた。

「お前ら、そんなことより助けてくれよ……!」

ニードの切実な願いが聞こえてきたのは、そんな時だった。

「……あ、」

「リタお前……“あ、”じゃねえだろがっ!」

「ニード、話は最後まで聞け!」

このやり取りのせいでニードの説教時間が長引いてしまったのは自業自得というか、なんというか……。
時は経ち、翌朝。

「……リツカ、わたしキサゴナ遺跡に行ってくる」

朝食を食べ終わると、リタはテーブルの向かいにいるリツカにそう告げた。

「ダメよ、危ないでしょ！ それに病み上がりなんだから……」

案の定、リツカは反対した。

しかしリタも引かない。

「ちゃんと峠にも行けたんだから大丈夫だよ！ それにリツカ、ルイーダさんのこと気になるんでしょ？」

ルイーダは依然としてウォル口村に訪れていなかった。リツカは、父の知り合いかもしれないその女性のことを、ずっと気にしていたのだった。

「なんじゃ。昨日からずっとボートとしてると思ったら……そうい

うことだったのか」

横から口を開いたのは、リツカと共に暮らすリツカの祖父だ。

チャンス、とばかりにリタは畳み掛ける。

「そうなんだよ、おじいさん！ ルイーダさんのことが心配だし…
…お願い！！ いいでしょ？」

根負けしたリツカは、ふう……と溜息をついた。

「……分かった。でも、無理はしないでね」

「ありがとうっ！！ じゃあ早速準備して行ってくる！」

喜々としてリツカにお礼を言った後、食器を片付けて足早に外へ出た。

「あ……そうだ、ニードさんも誘った方がいいのかな？」

あの村長の息子は、リツカの為なら何でもやりそうだ。

（一応、様子を見に行こうかな）

そう思い、村長の家の前までやって来たのだ……が。

「怒鳴り声が聞こえる……」

何を言っているのかはサッパリだが、とにかく村長の怒鳴り声がやたらと聞こえてきた。

「もしかして、まだ昨日のことを怒られたりとか……いや、まさかね」

だが、そのまさかだったりする。

「……今日は一人で行こうと」

早々に二丁を誘うことを諦めたリタは、キサゴナ遺跡へと足を進めるのだった。

「ここが、キサゴナ遺跡……」

とても古い建物だった。

こんなところに、人なんてくるのだろうか……。しかし、件のルイーダはここに寄ったらしいのだから、中に入っ
て確かめなければならなかった。

(……やっぱ、ニードさん連れて来れば良かったかも)

今更に後悔の念が湧いて来た。
だが、ここでウォル口村へ戻るのは遠慮したい。

(もしかしたらルイーダさんがいるかもしれないのに、こんなこ
ろで引き返すせない……!!)

そついうわけで、村に戻るつもりはさらさら無いリタなのであった。

遺跡は、六角形の部屋を繋げ合わせた構造だった。

さすが遺跡と言っただけあって建物の中は辺りが暗く、あらゆるこ
ろが老朽化している。

人がいるのかどうかも疑わしい。

リタは暗いせいで物に足を取られたり、床が崩れかけたりと、この
中に入ってからロクなことが無かった。

「ルイーダさん、本当にこんなところに寄ったのかな……」

大分、奥地へと入り込んだのではなからうか。

「やっぱ、いないかなあ」

諦めかけたその時。

「誰かそこにいるのかしら？」

女の人の、声がした。

「あらビックリ！　こんなところで人に会うなんて珍しいこともあるのね」

「もしかして……ルイーダさん?!」

「どうして私の名前を……」

薄暗い闇の中、声のする方へと駆け寄ると瓦礫に足を取られた女の人を見つけた。

「大丈夫ですか?!」

「大丈夫! と言いたところだけど……残念ながらあまり大丈夫と言えないわ。ねえあなた、その瓦礫を退けて下さない?」

「あ、はいっ!」

ケガは大したことないんだけど足を挟まれちゃって動けないのよねー、とぼやくルイーダ。急いで瓦礫の山を崩そうと奮闘し始めたりタだったが……

どこからともなく、地響きが鳴りはじめた。

「何、この音……」

「ヤッよ、ヤツが来たわ……!!」

“ヤッ”という言葉に首を傾げたりタだったが、ルイーダの視線の先を見て硬直した。

「アイツから逃げようとして落ちてきた瓦礫に挟まれたの。頭上にも気をつけてちょうだい!」

やたらと大きいシルエツトが浮かんでいる。それはだんだんと自分達の方に近付きつつあり、数メートルの距離になった時、その全貌を明かした。

その正体は、鋭く大きい角が特徴的な全身毛むくじらの怪物・ブルドーガ。

「い、猪っ?!」

角が生えているけれども。

見た感じは猪のようだった。

(早くルイーダさんの瓦礫を退けないと……!!)

焦っているからか……なかなか作業は、はかどらない。

「あなた、私のことはもう良いわ、早く逃げなさい!」

「いやですー!! 逃げる時は一緒に逃げます!!」

怪物は、一歩また一歩とリタ達に近付きつつあった。

これではもう、二人揃って逃げられそうもない。

そう判断したリタは、ルイードと怪物・ブルドーガの間に立ちはだかった。

「何を……！」

目を見張るルイード。

「駄目よ！ はやく、あなただけでも……」

「ここを出る時は、ルイードさんも一緒です……！」

リタの右手には、剣が握られていた。

それは、リツカの家のお宝から出てきた剣だった。

処分に困っていたらしいので、くれないかと言ったところアッサリとOKを貰ったものだ。

『でも……とても古い剣だから、使えるか分からないよ？』

ウォル口村近辺に出没する小物モンスターには、おあつらえなのが……リッカの言う通り、とても古い剣なので、こんな巨大モンスターに通用するのが分からなかった。

（わたし、とても無謀なことしてるような気が……）

自覚はある。

それに、リタはもともと剣の使い手ではないのだ。

「でも、負ける訳にはいかない!!」

鞘を投げ捨て、ブルドーガへと立ち向かった。

相手が突進してくるのを避けつつ、後ろ脚に切り付ける。剣が古いだけあって、つけることの出来た傷は浅かった。

「やっぱり……」

ここは、四肢を狙って動きを封じるしかない。

次は前脚に狙いを定め、猛進してくるブルドーガを待ち構えた。

そして一歩踏み出した、その時。

「うわっ……?!」

目の前に瓦礫が降ってきて、思わず立ち止まった。

しかも、ブルドーガは相変わらずこちらへ向かって来ている。

(やば……)

来るだろう怪物に身構え、目をつぶると。

衝撃と浮遊感に襲われた。

そしてその直後、背中に壁を感じ、突き飛ばされたことが分かった。

「うっ……」

あまりにも大きな衝撃にむせそうになる。痛む体を我慢して立ち上がり、目を開いた。結構な距離を飛ばされたらしい。

手元にある剣を、しっかりと握りしめた。

（わたし達は、二人でウォル口村に帰る……！！）

そう思うと、力が湧いてくるのを感じた。

「……はああっ！！」

後ろ向きのブルドーガへ向かって突進し、高く跳躍すると一閃した。

同時に、巨体がくずおれるように倒れた。

「た、倒せた？」

横たわる巨体は、言わずもがなブルドーガのもので。

「良かったあ……」

一安心したリタは、そのまま意識を手放した。

「ん……あれ？」

まず初めに草の匂いがした。

「ここは?!」

ガバツと身を起こす。目の前にはさっきまで中にいた遺跡が佇んでいた。

「あら、やっと起きたのね?」

すぐ隣には、ルイーダがいた。

「ルイーダ、さん……?」

「あの後、ドサクサでうまく足が抜けたから外に出てきたのよ」

つまり、リタを抱えて遺跡を脱出した……と。
そういうことだった。

「それにしても……あなた、見かけによらず強いね。おかげで助かったわ。名前は何というの?」

「リタです」

「リタ、ね。もしかして……あなたウォル口村から来たんでしょう。知ってたみたいだけど、私はルイーダ。セントシュタインで酒場をしているワケアリの女よ」

「酒場……ですか」

酒場……リタには全く縁の無い場所である。

「酒場って言うても少し特殊な店なんですけどね。……さて、わたしはウォル口村へ向かうことにするわね。あなたはもう少し休んでから来なさい。お礼はあらためて。アデュー！」

「ええっ、ルイーダさん?!」

引き留める間も無く、ルイーダは颯爽と去って行った。

「……行っちゃった」

しばらくの間、リタは去って行く後ろ姿を呆然と見送ったのであつ

た。

リタがウォル口村に着いたのは、日の沈みかけた夕方頃のことだった。

「わ……すっかり暗くなっちゃった」

辺りはすっかり暗く、星が瞬き始めている。早く帰らなければ、リツカが心配してしまう。

まあ……現在進行形で心配しているかもしれないが。

（でも、もしかしたらルイーダさんに話を聞いてるかもしれないし……）

そうであることを祈る。

ウォル口村の門をくぐり、一目散にリツカの家へと向かった。

すると、家の周りをさ迷う一人の幽霊を発見した。

「あれ……？」

困ったようにうつつく男性の幽霊。その様子から何かあったらしい

ことが伺える。

「どうかしたんですか？」

「うひゃうっ!!」

声をかけるとその男性は肩を揺らせて驚いた。そして後ろを振り返る。

「ビックリしたなあ。驚かせないで下さいよ……ってあなた、私が見えるんですか!? 私とはつくに死んでるんですよ?!」

「ああはい……わたし、この村の守護天使ですから！」

言い切ってから、自分の格好を思い出した。

天使の象徴である羽と光輪が無い上、不思議な服を着ている。

自分は天使だと信じてもらえるのだろうか……。

「えっと……ちょっとした事情があつて、今はこんな姿なんだけど……」

「守護天使様?! そうでしたか。どうりで私が見えるわけだ……」

どうやら納得してくれたらしい。普通の人間には幽霊は見えないので、それであっさりと理解してくれたみたいだ。

「そうだ、自己紹介がまだでしたな。私はリベルトと申します」「

「リベルト……?」

最近、どこかで聞いたことがある気がする。どこで聞いたのだったか……。

(……思い出したっ!)

ここに落ちてきたばかりの時、その名前を聞いたことがあった。

「リツカの……お父様?!」

「そこ、ちょっと待ったあ————!!」

直後、ピンク色の光がリタの後頭部に激突した。「いったあゝい」

ピンク色の光の正体は……妖精のような羽を持つ、どうみてもギャルみたいな格好をしたモノだった。

「ちよつとお、ボケツとしてないで上手くかわしなさいよう！」

無茶をおっしやる。

驚いて咄嗟に声が出ないリタをじっと見つめ、そうしてからようやく妖精らしきモノは口を開いた。

「アンタと……あとオツサン、今天使とか言ってたよね？ あたしもそう思ったケド……いまいち確信が持てないのよネ。アンタ、ワツカも翼も無いのよ？」

外見を裏切らない喋り方をする、それを見て呆氣にとられながらもリタはとりあえず気になっていることを聞いてみた。

「えつと……妖精？」

妖精は普通、こんなギャルみたいな姿をしているだろうか？

「んー、妖精ってゆーかぁ……」

間を置いて、妖精らしきモノはリタ達の前で決めポーズを決めてみせた。

「聞いて驚けっ！ あたしは謎の乙女サンディ、あの天の箱舟の運転士よっー!!」

ちなみに“乙女”と書いて“ギャル”と読むらしい……。

「えええ~~~~っ?!!」

リタは素直に驚いた。

「天の箱舟って……あの天の箱舟?!」

「それ以外に何があるっていうのヨ……」

驚いた、この小さいギャルみたいな子 サンディが運転していた

とは。

「サンディが謎なら、箱舟も謎だわ……」

「ちょっとアンタ、失礼なこと言わないでくんない?！」

「あの一……」

自分で謎の乙女って言ったのに……と思っていたと、すっかり場の空気に飲み込まれてしまっていたリベルトが遠慮がちに声をかけた。

「あ、ごめんなさいリベルトさん」

「てゆうかさ……どう見ても人間なのに天の箱舟や魂は見えるって、あんた一体何者?」

天使だと認めてくれないサンディに、リタは一生懸命訴えた。

「だから守護天使ですつてばあ! 地震が起きた時、天使界から落ちちゃって気付いたら羽根もわっかも無くなってたんです……」

「ふーん、そうだったんだ。なーんか信じられないんですケド……
そうだった」

サンディは何か思い付いたらしく、リベルトを指差し、こう提案した。

「それなら、このオッサンを昇天させてみなさいよ。それが出来てこそ天使つしょ！　それが出来たら天の箱舟に乗せてあげてもいいわ」

「ホントに?!」

リタの目が輝くのを見て、サンディは「ホント、ホント」と上機嫌に頷いた。

「リベルトさんっ」

この時のリタの顔は、それはそれは輝いていたのだとか。

『未練……ですか？　そうだ、宿屋の裏の高台に埋めたものがあるんですが、それかもしれません。掘り出してはくれませんか?』

それが、リベルトの昇天しない理由だった。

「じゃあ、わたしそれ取ってきますす！」

リタは茂みの中をガサガサとまさぐった。サンディには、頼んでカ
ンテラを持ってもらっていた。面倒だと文句を垂れたがこれが無い
と作業がはかどらないことは分かっているらしい。文句を言いつつ
も、ちゃんと手元を照らしてくれていた。

それにしても、探し物がなんなのかは分からないが……。
すると、昔に土が掘り起こされているような痕跡を見つけた。そこ
だけは草で覆われていなかった。

「あ、確か……掘り出すって言ってたっけ」

試しに、古ぼけた銅の剣を使って掘ってみる。使い方が間違ってい
る、というサンディの言葉はこの際無視である。すると……

「……トロフィー？」

なんと、金ぴかのトロフィーが発掘された。

リベルトのところへトロフィーを持って行くと、リベルトの顔はた
ちまちにほころんだ。

「おおっ！　そうです、これこそ宿王のトロフィー！」

トロフィーを見るリベルトは、なんだか懐かしそうだった。

「実はずっと封印していたんですよ、リツカのために、セントシュタインへの思いを断ち切るために……」

「リベルトさん、宿王って……宿の王様なんですか?！」

「ええ、まあ……そういうことになりますかね」

「すごいですっ!」

リベルトは、リタの称賛の言葉に照れたように頭を掻いた。
金びかのトロフィーは、存在を主張するかのようにキラキラと輝いている。

(……そうだった)

「リベルトさん、これ少し借りていいですか?」

「いいですよ。でも何に使うのですか?」

リタはトロフィーをリベルトに少し貸してもらい、リツカの家へと入ろうとした。

（リツカに見せたらビックリするかな……？）

父親の遺品を見たら喜んでくれるだろう、そう思い戸を開こうとしたが。

「あれ……人がいない？」

リツカの祖父でさえいなかった。

（宿の方かなあ……）

ウォルロ村に一つしかない宿へ顔を向けると、明かりが灯っているのが見えた。

（今日に限って皆あっちにいるなんて、どうかしたのかな）

不思議に思いながら宿の戸を開ける。そこにはリツカや祖父の他に、

客であるルイーダの姿があった。

「わたし、セントシユタインには行きませんか!」

しかも、入ると同時にリツカの声がした。

「どうしたの、リツカ……?」

キョトンとして戸の脇に突っ立っていると、それに気付いたリツカが出迎えに来てくれた。

「おかえりなさいリタ、遅かったじゃない! ……あら、このトロフィーは?」

戸の陰にあったトロフィーを明かりに照らすと、さらにトロフィーは輝いて見えた。

「これは……宿王のトロフィー! しかもお父さんの! どうして……」

困惑するリツカに、今まで黙っていたリツカの祖父が椅子から立ち上がった。

「そのことについては、ワシから話そう」

「……おじいちゃん」

それから、祖父はリベルトのことについて語った。

リツカの父は宿王だったこと、リツカは病弱でそのためにウォルロ村に越してきたこと。宿王の称号よりもリツカが大切だったということ。

「この村に来てからも、リベルトの宿への熱意は変わらなかった……」

それは、お前もよく分かっているだろう……？

「お父さん……。わたし、小さい頃から気になってたの。お父さんの遠くを見るような視線……。お父さん、セントシュタインの宿のことを忘れられなかったのね」

しばらく下を向いて考え込んでいたリツカだったが、やがて決心したように顔を上げ前を向いた。

「何が出来るか分からないけど……。おじいちゃん、リタ、わたし……ルイーダさんの申し出を引き受けてみるよ！」

ついにリツカが決心をし、祖父はそれが良いと後押ししてくれた。

『まさかリツカが私の夢を継いでくれるなんて、あの子も大きくなつたものです。もう思い残すことはありません……。』

リベルトの体が淡い光を放ち始めた。

『ああ、どうやらお別れのようですね。ありがとうございます、ウオル口村の守護天使様……。』

リベルトは穏やかに笑い、そしてスッと消えて行った。

（リベルトさん……。どうか安らかに眠って下さい）

次の日、リツカはセントシュタインへと旅立つこととなった。
数日後……。土砂崩れは取り除かれ、峠の道は開通した。

そして、リツカがセントシュタインへと旅立つ日。

「離れ離れになっちゃうけど……元気でね、おじいちゃん！」

「都会暮らしは慣れんだろうが、くれぐれも身体を壊さぬようにな。ルイーダさん、よろしく頼みますぞ」

「はい、お任せ下さい」

ルイーダが頷き、リツカは祖父に笑顔を向けた後、リタを振り返った。

「リタ、あなたにはすっごくお世話になっちゃった。本当にありがとう。お父さんのトロフィーを見つけてきちゃうなんて、不思議な人ね。もしかしてリタ、本当は天使様だったりして」

「へっ?!」

「……なんてね! もし途中でセントシュタインに寄ることがあったら絶対宿屋にも寄って行ってね!」

実は天使というのは真実なのだが……。冗談だったことに安心しな

がらリタはそれらに笑顔で応じた。

「あ、ありがとうリツカ。その時は喜んで寄らせてもらっつ！」

そして、リツカは少し距離を置くニードにも声をかけた。

「この村の宿、ニードが継いでくれるんでしょう？ 勝手な話だけど、わたしあの宿を閉じたくなかったから……ありがとう！」

「親父が働けっつてうるさいからな。俺がやるからには、セントシュタインよりビッグな宿にしてやるよ！」

何だかんだ言いながら、ニードも結局はリツカを送り出してくれた。

「それじゃ行ってきます！ 皆、今までありがとう！-！」

そしてリツカ達は、旅立っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7878z/>

ドラゴンクエスト? ~天恵物語~

2011年12月25日12時51分発行